

キリストさんと呼ばれて

——この時代、この地でキリスト者であること

吉 田 隆

はじめに

東日本大震災で被災した日本の教会を神学的・宣教学的に支援するという、きわめてユニークかつ意義深いご支援をフラワースクールがしてくださっていますことを、日本の牧師として、とりわけ被災地におりました牧師として、心より御礼申し上げます。

二〇一一年三月一日午後二時四六分から立て続けに起こりました地震・津波、そして原発事故という三重の災害を、神によって与えられた一つの「時（カイロス）」と捉え、それをきっかけに起こりました被災地内外の諸教会やキリスト教諸団体の動きや働きを神学的・実践的に考察し、これからの日本宣教におけるビジョンを共に仰いで行くこと。それが三・一一を経た日本の教会から世界のキリスト教に対する一つの貢献となり得るのではないか。そのような問題意識が、このシンポジウムの基調にあるのだと理解しております。

前回、第三回のシンポジウムが行われた二〇一四年の大雪の日、雪でグチョグチョになった靴を履いたまま、奉仕を

する予定の分科会の時間ぎりぎりにここに到着したことをよく覚えております。そして、その年の春に私は、現在の仕事のために長年住み慣れた、そして何より被災地である東北の地を離れて、関西へと移ってまいりました。現在も「東北ヘルプ」の代表を務めさせていただいておりますが、かろうじてメールやスカイプでの会議を通してだけのつながりになってしまいました。まことに寂しい、そして申し訳ない思いでいっぱいです。

けれども、おそらくはここにおられる多くの方々同様、あの日を経験した者にとりまして、もはやあの日以前の心に戻ることではできません。また、後ほど現地からの様々な報告がなされると思いますが、実際に、五年を迎えようとしている今でも心や体に傷が残っている人たちが、そして、見えにくい形ではありますが、依然として災害は現在進行形であるという放射能災害の現実を知っている者にとりましては、とても過去のこととして論じることではできないのです。

しかしながら、本日私に与えられた務めは、今回のテーマであります「キリストさんと呼ばれて——この時代、この地でキリスト者であること」について、お話しすることであります。「この時代」はともかく、「この地で」という言葉をもはや「被災地で」という意味では語る資格が無くなってしまった者ではあります。依然として「この国」にいる者として、限られた時間ではありますが、語らせていただきたいと思えます。

1 今回の主題について

さて、このシンポジウムはフラー神学校との共催ということもございました。毎回、テーマに英語のサブタイトルが付いています。この英語のタイトルがなかなかわかりやすい。つまり、あいまいな日本語ではわからない意図がよく表

現されているなあと、いつも感心しながら拝見しております。今回は、さすがに「キリストさん」は「キリストさん」なのですが、サブタイトルは「Re-visiting Christian Identity in Post-disaster Japan」となっています。「この時代、この地で」というのは、Post-disaster の Japan なんだということがよくわかります。それで、今は関西にいる私が話してもいいのだと安心した次第であります。

それから「キリスト者であること」。これが“Re-visiting Christian Identity”となっています。この場合の「revisit」というのは「再検討」あるいは「捉え直し」というほどの意味でしょうか。つまり、震災前の日本において私たちが善きにつけ悪しきにつけ持つておりました「キリスト者像」というものがあつたわけですが、あの震災以降の日本において、それがもう一度問い直されているのではないか。こういう問題意識ではないかと思えます。第二回のシンポジウムでは「苦難に寄り添い、前に向かう教会」というふうに「教会」がテーマとなりました。実際、あの震災以降、とりわけ東北にある諸教会は教会の在り方が問われた。また、それを背後で支えた支援活動においては、集団としての教会あるいは教派の働き、あるいは教派を超えた超教派、そして時には超宗教という協働さえなされて、そうしてあの甚大な被害に立ち向かうという協力体制が実に大きな力を発揮したことは言うまでもありません。また、そのような協力体制があつたからこそ、今もなお支援活動が続けられているわけです。一人ひとりではどうにもならない現実がそこにはあつたのです。

しかし、今回は、もつと根本的に一人ひとりの「キリスト者」の在り方、それを問いただそうとしているわけです。実際、支援活動の「現場」ということで言いますと、やはり最終的には一人ひとりが問題となる。支援物資をヘリコプターで空からばら撒くわけではない、一人ひとりの手によって被災者の元に届ける。あるいは、一人ひとりの被災者に向き合つて何時間でもその話を傾ける。結局は、そうした一人ひとりと心の通い合いということが、支援活動の質を決めるわけです。そして、そのようにして打ちたてられた個々人との信頼関係があつたからこそ、五年経つた今で

も活動が続いているということでもあるのです。

さて、今回のテーマは、そのようにキリスト者一人ひとりの働きが為されていった現場で、被災者の方々の口から「キリストさん」という言葉が語られた。その言葉に注目しているわけです。東北に限らないかもしれませんが、普通の人たちはキリスト教やクリスチャン一般をさして「教会さん」という言い方をよくしますね。ですが、被災支援活動の現場では、その背後にある「教会」という存在よりも目の前にいる一人ひとりのキリスト者たちの存在が意味を持つためでしょうか、「教会さん」ではなくて「キリストさん」と呼ばれることがよくあったのです。おそらくそれは「キリスト教の方」「キリスト教の皆さん」というような意味で用いられたのかもしれませんが、しかし、例えば仏教徒の方を「仏（ほとけ）さん」とは普通は言いませんよね。ちよつと別な意味になってしまいますから。ですから「キリストさん」という呼び方は、単純にクリスチャンということだけでは、何かそこに私たち自身も気づいていなかった大切な意味が含まれているのではないか、そういう思いを抱かせてくれたのです。

震災直後から被災地に何度も足を運んでくださったある牧師先生が、震災があつた二〇一一年に発行された雑誌でこんなことを書いておられました。それは私の中に深く刻まれる印象を残しました。こんな文章です――

「なにもかもなくなつたんだあ」と家を流されたおばあさんが呟いた。「一人の孫は見つかつたけど、下の孫はまだ見つからない。牧師さん、きつと見つかるよね」と訴えるおじいさん……。叫びながら流されていく家族、友人をただ見つめるしかなかった人たち。一人一人を訪問し必要なものを聞き、用意ができる限り持つていく。目の前にいる苦しみ痛む人々への直接支援は、共にいることしかない。

訪問した家での出来事である。「あんたら何持つてんのか?」と聞かれた。「何も持つてません。だけど必要なものがあればできる範囲で揃えます」と答えた。「おらなんにもいらねえ。ただあんたら来ると元気に

なるべ。あんたらキリストさんしょってつからな」と言われた。私たちは何も持っていないなくても、キリストを持つているということを教えられた瞬間だった。神様から派遣されることの深みを教えられた。何もできないけれど、キリストがここに立っておられる。そのキリストが被災者に寄り添っておられる。そこに、み言葉がある。「となりびと」とは「寄り添いびと」である。

（「危機に聴くみ言葉」『説教黙想アレテイエ』特別増刊号、一一七頁）

まるで、あの「美しの門」でのペトロのように「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」（使徒三・六、新改訳）。この信仰、この真理を、私たち自身が被災者の方から気づかせていただいた。いや、むしろそんな大切なことさえも忘れて、目の前の現実に圧倒されて、自分には本当にもできないと、何もできないけれど何かこの人のためにしたいと思つてたはず。そのような姿に対してこそ、「あんたらキリストをしょってる」と言われたのではないだろうか。そこにある神学的な含蓄は何なのか。日本宣教における私たちの在り方について見直すべきこと、あるいは新たな可能性ということがそこにはあるのではないか。これが、本講演の問題意識であります。

2 「キリスト者」という名称——歴史的考察

(1) 聖書

ご存じのように、ナザレのイエスこそメシヤ、すなわちキリストと信じている人々が「キリスト者 (Χριστιανός)」と呼ばれるようになりましたのは、使徒言行録一章二六節によれば、異邦人の町アンテオキアにおいてでした。しかしその後、この名称はキリスト教の拡大と共に急速に広まっていったようで、同じく使徒言行録の二六章二八節では、パウロが伝道しましたヘロデ・アグリッパという王の口からも「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか」(新共同訳)と語られます。そして、もう一カ所、新約聖書にこの単語が出てまいりますのは、ペトロの第一の手紙四章一六節で、ペトロが迫害下にある小アジアの諸教会に向けて語った言葉の中にございます。あなたたちは自分自身の悪しき行いによって責められたり苦しんだりすることのないようにしなさい。しかし、もし「キリスト者として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい」(新共同訳)と云うのです。

これらの例からおわかりのように、「キリスト者」という名称は、決してイエスの弟子たち自身が考え出した呼び方ではなく、他の人々、それも「キリスト」の何たるかがよくわかっていない異邦人世界で、信者たちを奇異な目で見、揶揄したり軽蔑したりする名称として生まれたということです。

(2) 同時代の聖書外資料(異邦人・ユダヤ人)

実際に聖書以外でこの「キリスト者」という名称が用いられた例をいくつか挙げますと、一世紀末にユダヤ人歴史家のヨセフスによつて書かれた『ユダヤ古代誌』⁽¹⁾の中に「彼「キリスト」の名にちなんでクリステイアノイ(キリスト教徒)と呼ばれる族(やから)は、その後現在にいたるまで、連綿として残っている」とあります(XVIII…三…三、秦剛平訳)。このヨセフスの記述は後の時代の挿入ではないかと言われることがございます。しかし、たとえ本人によるものではなかったとしても、ヨセフスのおりました一世紀末に「キリスト者」という名称が広く用いられていたことは確実でありまして、そのことは、ヨセフスとほとんど同時代にローマ人によつて書かれた二つ三つの有名な文書にも言及されていることから明らかです。

一つは、小アジアのビティニア州の総督であつたプリニウスから時の皇帝トラヤヌスに宛てて書かれた有名な書簡です。その中に「キリスト者」として訴えられた人々の取り扱いについてプリニウスが尋ねるといふ大変興味深い文書があります(『書簡集』⁽²⁾一〇・九六―九七)。ここでは「キリスト者」という名前で呼ばれている人々を、何の犯罪が無くともその名前のゆえに処罰すべきなのか、それとも何か実際に罪を犯した場合にのみ罰すべきなのかというような問題が論じられています。プリニウスは、このキリスト教徒たちが今や非常に多く、あらゆる年齢や階級の男女に及んでいること、また都市ばかりでなく村や田園地方にさえも広まっているという事実を報告しています。プリニウスが仕えておりましたビティニア州というのは、先のペトロの手紙が送られた地域ですから、いっそう重要な証言です。

このプリニウスと親しかつたと言われる歴史家のスエトニウスも『ローマ皇帝伝』⁽³⁾という書物の中で、特に皇帝ネロの時代に「前代未聞の有害な迷信に囚われた人種であるクリストウス信奉者」に処罰が科せられたと記しています

(VI・一六。国原吉乃助訳)。このネロによる「キリスト者」への迫害については、やはり同じ頃に記された、有名なタキトゥスの『年代記』⁽⁴⁾の中にも出てきます(一五・四四)。

ネロ帝は、一般に「キリスト信者」と呼ばれて、そのいまわしい行為のゆえに憎悪されていた人々を犯罪者に仕立て、残虐の限りをつくして彼らを(ローマの大火の責任を負わせて)罰したのである。「キリスト信者」という名前は、キリストから来ているのであるが、この人物はテベリオ帝の治下に、行政長官ポンテオ・ピラトの手によって死刑に処せられた。

(ベッテンソン『キリスト教文書資料集』⁽⁵⁾より)

これらの文書に共通して見られるのは、当時のローマ帝国内で非合法とされていた「迷信」を信じる「キリスト者」と呼ばれる人々に対する蔑視や嫌悪感、しかしまた、まるで「疫病」のように増え拡がっている人々に対する戸惑いのような感情も見受けられます。多くの場合、驚くべき迷信と忌まわしい行為(例えば、人肉嗜食や近親相姦など)との誤解に基づいて検挙されたわけですが、実際捕えて尋問してみると特段犯罪と言えるような行為をしているわけではな^い。いな、むしろ実際のキリスト教徒たちが善良な人々であることを知っていたからです。いずれにせよ、ローマ人たちにとって「キリスト者」とは「キリスト」という名前の教祖によって広められた、実に不思議なカルト集団という以上の意味は持たなかったようです。それどころか、多くの人々は、この「キリスト」という名称を人名と考えていましたので、時にはより一般的な「クレストゥス」という名前と間違われることさえありました(『ローマ皇帝伝』V・二五・四、テルトゥリアヌス『護教論』⁽⁶⁾三・五)。

このような異邦人世界での状況に対して、「キリスト」が何を意味するかを知っていたユダヤ人の間では、「キリスト

者」という名称よりも「ナザレ人の分派」(使徒二四・五) または「ナザレ派」と呼ばれていたようです(例えば、テルトゥリアヌス『マルキオン駁論』四・八)。

(3) 初期キリスト教会における用例

以上のように、この「キリスト者」という呼び名はユダヤ人の間ではもちろん、異邦人の間でも忌まわしいイメージしかもたらさなかつたようでありますが、大変興味深いことに、すでに第一ペトロで示唆されておりましたように、やがてこの侮蔑的な名称を信者たち自身がむしろ光榮な名称であると考えるようになりました。すなわち、キリストの名で苦しみを受けることは、私たちにとって本望なのだと思えるようになっていったのです。

このようにキリスト教徒自身がこの名称を積極的に用いるようになった最初の例は、「キリスト者」という名称が初めて語られ始めたアンテيوخアの町の監督でありましたイグナテウスという人の手紙の中に見られます。彼は殉教するためにローマに連れて行かれる途中で何通もの手紙を書きましたが、そのうちローマの教会に宛てた手紙の中で、このように書いています。

私が、外的にも内的にも、力づけられることだけを祈ってください。それは私がただ口で言うだけでなく、(実際) 意志するため、(人々に) キリスト者と称せられるだけでなく、実際にそうだと(神に) 認められるためなのです。何故なら、(神にキリスト者と) 認められたとき、私はまた(人々にもキリスト者だと) 称せられうるのだし、この世に見えぬようになったとき、(神に対して) 忠実でありうるからです。(『イグ

ナテيوخスの手紙』⁽⁸⁾三・一二)

つまり、信者たちや指導者たちは、単に「ナザレ派」というような宗派としてではなく、自分たちはキリストに属する者、キリストの名を負う者であり、その名にふさわしく生きるべき者なのだという、自らのアイデンティティを表す名称となったということなのです。

(4) 中世の聖人伝説「グリストフォロス（キリストを負う者）」

古代教会における「キリスト者」についての話はそこまでにしたいと思いますが、最後にもう一つ、ちょっと面白いお話をしておきたいと思います。ご存じの方も多と思いますが、グリストフォロス——英語ではクリストファーという名前の元になった人——の話です。この人は、三世紀に殉教したと言われておりますが、中世の時代に書かれた『黄金伝説』⁽⁹⁾という様々な聖人についての伝説を集めた書物にその話が収められてから非常にポピュラーになりました。

この人は、もともとカナン人の凶暴な大男であったそうです。そして、最も強い王様に仕えようと家来になりましたが、その王様が悪魔を恐れることがわかりますと、今度は悪魔の家来になる。ところが、その悪魔がイエスを恐れたものですから、男はそのイエスという方の家来になろうと考えました。それで、イエスという方の家来になるにはどうすればいいかと、荒れ野で修業をしていた修道士に指示を仰いだところ、「お前は肉食漢なので断食はできそうもない。また、すぐ居眠りをするから徹夜の祈祷もできない。しかし、お前ははずうたいがでかくて力だけはあるから、体を使って主イエスのために奉仕をなさい。この先にある深い河は流れが急で旅人を困らせているから、お前はそこで渡し守りをしなさい」と言われます。男はその通り、せっせとこの務めに励みました。ある日のこと、小さな子どもが川を渡りて欲しいと男に頼みました。お安いで用と、男はひよいとその子を肩に載せます。ところが、川を進んで行くうちに

ドンドンと子どもが重くなる。ついには耐えられないほど重くなって男は川に沈みかけます。男は非常に恐れて「あなたはいつたいたなですか」と問うと、「わたしは世の罪を担ったキリストである。これから、お前は名前をキリストフォロス（キリストを担う者）と名乗りなさい」と言われたという話です。

もちろん、これは伝説ですが、聖人伝というのは往々にして庶民の靈性の反映、つまりキリスト者の理想像の反映という側面がございます。キリストフォロス、キリストを担う者。世の罪を担われた主イエス・キリストを背負う。それはとてつもなく大きく重い重荷で、とても私たちに担えるようなものではない。けれども、また同時に「キリスト者」とは、そのように主キリストを担う者ではないか。別に言えば、主イエスと同じようにこの世の苦しみを担う者となる。そのような務めに召されている者、それが「キリスト者」なのではないかという認識が、そこにはあるように思うのです。

(5) 宗教改革における「イミタチオ・クリステイ（キリストに倣いて）」

中世まで話が進みましたので、その延長で、宗教改革の話もさせていたきたいと思います。実は、このような中世の靈性は、とりわけ中世末期にデヴォチオ・モデルナ（新しい敬虔）という信仰運動として聖職者や修道士のみならず、一般信徒たちの生活実践を通してヨーロッパに広まることとなります。わけでも「イミタチオ・クリステイ（キリストに倣いて）」という靈性がその中心にございました。

この靈性は、ローマ・カトリック教会においては、有名なイグナチウス・デ・ロヨラの『靈操』⁽¹⁰⁾に表されたようなイエズス会の靈性につながっていくこととなりますが、実は宗教改革者たちの信仰もまた、この信仰運動と無縁ではなかったのです。プロテスタントにおけるこの「イミタチオ・クリステイ」のモチーフが最も明瞭に表れる一つの例が、

ジャン・カルヴァンという人が書きました書物の中に見られます。カルヴァン自身は、聖人と呼べるようなタイプの人ではありませんが、少なくとも「キリスト者」とは何かについての彼の文章を読むと、それは「キリストに倣う」者であるという強い確信があったことがよくわかります。

カルヴァンの名著である『キリスト教綱要』の第三卷第六章に「キリスト者の生活について」という有名な箇所がございます。この部分はすでに一六世紀において『綱要』から切り離されて一つのパンフレットとして出版され、また英語に訳されてイングランドでも広く読まれるようになりまして、おそらくは後のピューリタンにも大きな影響を与えたと考えられる文章なのです。その中で、カルヴァンは次のように述べています。

キリストにおいてわれわれを御自身に和解させたもうた父なる神は、そのようにまたキリストにおいて、われわれに「形」を（範例またひながたとして）証印し、われわれがこれを同じ形になるように欲したもうのである……。われわれは、われわれの生活において子となるためのきずなとして「キリストを表わす」という条件のもとに、主なる神によって子とされるのである。（Ⅲ：六：三）

わたしは、「キリスト」を名目と記号としてしかもたないのに、しかも、「キリスト者」という名で呼ばれたがっている人たちに、呼びかけなければならない。（Ⅲ：六：四）

わたしは、福音的な完全さに達していない人をキリスト者と認めないほどに、この福音的な完全さをきびしく要求するものではない……。（しかし）われわれはこの完全さを、唯一熱心に追及すべき目的として、目の前に置くべきである。（Ⅲ：六：五）

つまり、「キリスト者」というのは、単なる名称ではない。われわれは自分自身の生活を通して「キリスト」の名前を負う者としてふさわしく生きること、「キリストを表わす者」となることを熱心に求めるべきこと。それが「キリスト者」と呼ばれることの意味であり、神の子とされた者の特権であり使命なのだというわけです。そうして、カルヴァンは、この世を生きる「キリスト者」の在り方として「十字架を担う」ということを論じていくのです(Ⅲ・八)。ここには聖書と古代教会以来の信仰がよく表されていると思います。

以上、聖書から古代教会、そして宗教改革までの歴史における「キリスト者」という名称が持つ意味について、大雑把ではありますが確認してまいりました。残された時間、このように「キリスト」という名を負っている私たちが、今度はどうすればまさに「キリスト」ご自身を証しする者、つまりは「キリストさん」となるのか。とりわけ、宣教という文脈の中で、私たちが心すべき在り方また姿勢とは何か。それについて考えてみたいと思います。

3 宣教における「キリスト者」

(1) 宣教と社会的責任——『ローザンヌ誓約』(一九七四年)

その際に、まず、これまでの福音派教会の在り方、とりわけ福音派による宣教の概念を大きく変えた画期的な会議また文書としてしばしば指摘されてまいりました『ローザンヌ誓約』という文章を取り上げたいと思います。その中に「キリスト者の社会的責任」という項目がございます。大変重要な文章ですのでお読みします。

われわれは……、時には伝道と社会的責任とを互いに相容れないものとみなしてきたことに對し、ぎんげの意を表明する。たしかに人間同士の和解即神との和解ではない。社会的行動即伝道ではない。政治的解放即救いではない。しかしながら、われわれは、伝道と社会的政治的参与の両方が、ともにキリスト者の務めであることを表明する。なぜなら、それらはともに、われわれの神観、人間観、隣人愛の教理、イエス・キリストへの従順から発する当然のことだからである……。われわれが主張する救いは、われわれの個人的責任と社会的責任の全領域において、われわれ自身を変革していくものである。行いのない信仰は死んだものである。⁽¹²⁾

この鮮烈な文章の中で、私が特に興味深いと思いましたが、キリスト者の社会的責任は「われわれの神観、人間観、隣人愛の教理、イエス・キリストへの従順から当然のこととして帰結する」と言われている点です。私たちが御言葉を読んで神様について学ぶ、人間について学ぶ、そしてイエス様の教えをきちんと学んで行けば「当然」そのように導かれていくはずだと。これは実際その通りでありまして、事実として、愛の業による福音の証はキリスト教の歴史の中でいわば当然のこととして為されてきたのです。すなわち、それぞれの時代で、弱い立場や貧しい人々、あるいは様々な苦しみの中に置かれている人々という社会的問題が見えてきた時に、教会やキリスト者はいわば「本能的に」それに反応してきたという事実が多々あるからです。

(2) キリスト教史における愛の業

ほんのわずかな例を挙げるならば、ローマ帝国の退廃的な異教社会の中で見捨てられていた女性や赤ん坊や奴隷たちに対して、キリスト者たちは本能的に彼らを守るべく行動しました。彼らの多くの愛の業は、当時の異邦人社会にあつて驚きをもつて受け止められました。

しかし、やがてヨーロッパ社会そのものがキリスト教化されて教会が強大な権力を持つ組織へと変貌しますと、そのキリスト教社会において見落とされてきた貧しい人々・弱い人々に対して、今度は修道士と呼ばれる人たちが修道の一つ、つまりイエス・キリストに倣つて生きる働きとして、弱者へのケアに携わるようになります。宗教改革者たちも、修道院制度そのものは廃しましたが、その大切な愛の働きをプロテスタント共同体の中で継承していききました。

ところが、そのようなプロテスタント教会もまた国家と一体化し、やがて近代国家へと変化していきますと、とりわけ産業の革命的变化や発展という近代化のプロセスの中で多くの貧困層や孤児たち、また社会的な弱者が生まれてくる。すると、そのような社会の変化の狭間で置き去りにされていく人々、顧みられない人々に対して、やはり心ある教会やキリスト者たちが自主的に救済の手を差し伸べるといふ福祉的な働きが為されるようになりました。

さらに、近代における海外宣教について申し上げれば、未伝の地へと赴いて行つた宣教師たちは、現地における様々な社会問題を解決することが福音宣教の働きと一体的に必要な不可欠であると考えました。医療や教育、孤児や病人や障碍者、あるいは身売りをしなければならぬような女性たちへのケアなど、宣教地のいわば闇の部分に光をもたらす働きが福音宣教と一体的に為されました。これはもう皆さんご存じのとおりです（特に、日本におけるキリスト教社会福祉社の歴史については、日本キリスト教社会福祉学会編『日本キリスト教社会福祉の歴史』（二〇一四年、ミネルヴァ書

房)などを参照)。

(3) 愛の業の神学的根拠

以上のように、歴史の事実として、キリスト者たち、またキリスト教会は、それが一つの本能であるかのように人々の痛みと向き合ってきたわけですが、それとは別に、『ローザンヌ誓約』が言いました「われわれの神観、人間観、隣人愛の教理、イエス・キリストへの従順から当然のこととして帰結する」という、その聖書的基本原则は何か。これも簡単に確認しておきましょう。

① 神観——貧しい者の神

弱い立場にある人々を配慮しなさい。自分を愛するように隣人を愛しなさい。これは旧・新約聖書の最も重要な愛の戒めの中心にある教えですが、私たちが見落としがちなのは、そのような教えが述べられます時に、実は弱さや苦しみの中にある人々と、神がご自分を同一視されているということ。そういう人々の立場の側に、神がご自身を置いておられるということです。神様は天高くおられると私たちは考えてしまっているのですが、その神がいつたいどこに目を注いでおられるかということ、心に留めねばなりません。

② 人間観——「あなたがた自身がかつては」

旧約の律法には様々な人道的規定と呼ばれるものがありますが、その中にしばしば「あなたたち自身もかつては」というフレーズが繰り返されることにも注目したいと思います。「あなたたちのところに身を寄せる寄留者を大切にし

なさい。かつてあなたがた自身もエジプトに寄留していたのだから、その時の苦しみを忘れてはならない」（出二二・二〇、二三・九、レビ一九・三四など）。「孤児ややもめたちと一緒にお祝いをしないさい。あなたがたもかつては奴隷であったのだから」と。決して「お前たちは選民なのだから」という選民意識を植え付けているのではない。むしろ、救われる前に自分が何者であったか。どういう状態にいたかを、よく思い起こしなさいと。

これはとても大切な視点だと思うのです。神の掟を守る、愛の業をすと言った時に、「あなたがたは特権的な地位にいますのだからしてあげなさい」というのではなく、自分もともと惨めな状況にあった時のことを忘れてはいけません。そういう視点に立つて、そういう姿勢でケアをしなければいけません。つまりは、上から目線ではなく、相手と同じ目線で、相手の気持ちを思いはかつてしなさいということです。

③ イエス・キリストの教え

以上のような神の視点ということは、もつとはつきりした形で、主イエスによつて教えられています。とりわけ、有名なマタイによる福音書二五章では、飢えている者・渴いている者・病める者たち、その「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（二五・四〇）とイエスはおっしゃいました。このマタイ二五章は、天国に行く者とそうでない者とが分けられる最後の審判について教えている所ですね。そこで、主は集められた者たちに「お前たちは何を信じたか」とは問うておられない。「何をしたのか」を問うておられる。もちろんそれは、行いによる救いを教えているということではありません。そうではありませんが、主イエスに対する心ということと「最も小さい者」への心遣いということとを一つのこととして教えておられる。主を愛することと小さい者を愛することは一つのことだと。なぜなら、その「小さい者」は主ご自身のものだからです。

そして、震災を通して私が何度も思いめぐらしました御言葉が、あの「善きサマリア人」のたとえ（ルカ一〇・二五

以下)です。あのたとえ話は、サマリア人というユダヤ人が毛嫌いしておりました異端者が、瀕死の人(おそらくはユダヤ人)を助けるという衝撃的な教えです。この話を私自身が思いめぐらす中で深く教えられましたのも、イエスの視点ということでした。主イエスの視点が、実は倒れている人の所にあることに気づかされたからです。倒れている人にとっては、そこに祭司が通ろうがレビ人が通ろうが関係ない。肩書は関係ないのです。その人がどういう宗教であろうが、どういう社会的地位の人であろうが関係ない。倒れている人にとっては、助けてくれる人が善い人だからです。そして、まさにその倒れている人の視点から、イエスは見ておられる。いえ、イエスご自身が倒れておられるということ。そのことをあらためて教えられました。

私たちの信ずる神というお方は、このような方です。天高くおられて、高い所、目立つ所しか目に入らないという方ではありません。むしろ倒れている人の視点、お腹を空かせている人の視点、抑圧されている人の視点から、この世界を、そして私たちを見ておられる。そのことに気づかされました。

④ イエス・キリストの模範

そして言うまでもなく、イエス・キリストご自身の模範があります。主イエスは、わたしがこの世に來たのは「仕えられるためではなく仕えるため」だとおっしゃいました(マルコ一〇・四五)。そして、弟子たちの汚い足を、自ら奴隷のようにして洗われ「師であるわたしがこのように模範を示したのだから、お前たちも同じようにしなさい。お前たちの師であるわたしがお前たちの奴隷になったのだから、お前たちも互いにそのようにしなさい」とおっしゃいました(ヨハネ一三・一四―一五)。神の御子であられた方が、それに固執することなく低くなられ、実に十字架の死に至るまで従順であられた(フィリピ二・六―八)。このイエス・キリストの僕性(サーヴァント・シップ)ということ。このことが、すべてのキリスト者が愛の業へと招かれている神学的根拠であります。

しかし、それだけでもない。主イエスの愛の模範には、まさに「存在としての福音」とも言うべき側面があった。このこともまた私たちはしばしば忘れがちなのではないかと思えます。イエスは、敵対者たちから「あいつは大食漢で大酒飲みだ」と言われました（マタイ一・一九）。どれほど飲んだり食べたりしておられたのかはよくわかりませんが、とにかくしょっちゅう食べたり飲んだりしている。独りではありません。「罪人」たちとです。要するに、社会的な弱者、世間の人々との付き合いからはじき出されている人たちです。そういう人たちと付き合い合うといつたら、まずは食べることでしょう。飲むことでしょう。付き合うのですから。付き合わないなら、自分を聖く保とうとするなら、そんなことする必要はありません。けれども、一緒に交わりを持つとうとするのならどうするのかということイエスはお示しになったのだと思います。

イエスの所には、罪人と呼ばれた徴税人や水商売の女性たちや、その類の人々が大勢集まってきました。いつも高尚な教えをなさつて、また見るからに近づき難い後光を放つような（よく聖画などで描かれる）そういう聖人としてのイエス様だったら絶対近づかなかつただろうと思います。別に言えば、人間としての魅力が主イエスにあつたからこそ、彼らはこの方に心を開いたのだと思うのです。

イエスに対する（大食漢で大酒飲みという）批判が書かれております箇所（すぐ後に、有名な「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのみに来なさい」という御言葉が語られます（マタイ一・二八））。この御言葉は、ですから、決して単なる人集めのための宣伝文句なのではない。そうではなく、事実を語った言葉だということです。本当に主イエスは、疲れた人・重荷を負っている人を招かれた。あるいは自分のほうから出かけて行って、人々の魂の疲れを癒された。重荷を降ろしてあげたのです。

何によつてでしょうか。説教によつてでしょうか。それもあるかもしれませんが。イエス様の説教はきつと面白いお話だつたと思います。少なくともそのような人々に対してお語りになつた説教は、聞いているだけで気持ちが軽くなるよ

うな楽しい説教だったのではないでしょう。が、それだけではない。何よりそこに一緒にいて楽しい。嬉しい。このことがあったのでしょうか。だからこそ、あの徴税人の頭でありましたザアカイも、イエス様が「ぜひお前の家に泊まりたい」と言ってくださった時には、もう大喜びで自宅に招いて、イエス様に喜んでいただくこうと、次から次へと食事をふるまったのでしょうか（ルカ一九・一一一〇）。イエス様が一緒にいてくださること自体が「福音」だったからです。何もそこで説教するとか奇跡をするということがなかったとしても、イエス様がおられること自体が喜びだったのです。

「福音」というのは、そうではありませんか。喜びでない「福音」などナンセンスです。イエス様がいらつしやるだけで嬉しいという、それが福音です。まさにイエス・キリストのご生涯そのものが「存在としての福音」であつたということ。御言葉によつて福音を伝えたというだけではなく、存在そのものが福音であつたということ。このことを忘れてはいけないと思います。

⑤ 他の新約聖書の教え

他にも、新約聖書には、弱い者・苦しんでいる者へのケアについての教えが至る所に記されています。ローマの信徒への手紙の中では「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい」と命じられています（一二・一五―一六）。意図的・意識的に、身分の低い人たちと交わりを持ちなさいと言われています。主イエスがそうだったからです。

時折、このような新約聖書の教えを「それは教会の中の信者同士のことを教えているのでしょ」う」という人がおりますが、それは実に貧しい聖書の読み方だと私は思います。「この世」を愛されるが故に御子をさえ与えてくださった神（ヨハネ三・一六）は、そんなに狭い方なのでしょうか。パウロは「すべての人の前で善を行うように心がけなさい。

できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさない」（ローマ二二・一七―一八）と言っています。神の救い、神の愛は大きい。神様の視点は実に広いのです。小さな教会の中でだけ満たされていればそれで良いという愛は、そもそも愛ではない。少なくとも主イエスに現された神の愛ではないと思います。

その文脈で大変興味深い御言葉に、マルコによる福音書一六章の御言葉があります。この箇所をどう解釈すべきかは（マルコ福音書の本文の問題と併せて）少し丁寧に論じなくてはいけないと思いますが、一六章の長い方の「結び」で、イエス様が弟子たちに宣教命令をなさいますね。その時に「すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（一六・一五）という言葉が記されています。「すべての造られたもの」と言われていて「すべての人」ではないのです。

ここからカトリックの方ならば、やはりフランチェスコのように鳥や他の動物たちに説教をしたというエピソードを思いつくかもしれないのですが、また、そのように想像すること自体信仰を豊かにすることだと私は思いますけれども、ここでは必ずしも全被造物を指しているのではないだろうと思います。しかし、単純に「すべての人」に伝えなさいと言うのではなく、「すべての造られたもの」に福音を宣べ伝えなさいという御言葉の意味は決して小さくないのではないかと思うのです。

パウロはローマの信徒への手紙八章で、被造物全体が今もうめき苦しんでいる、神の子たちの出現——イエス様の福音を信じて、喜びに生きる者たちの出現——を待ち望んでいると言っています（一九節以下）。これは大切なことです。パウロが言っている「神の子たちの出現」というのは、単純にクリスチャンであればいいということを言っているのではないと思います。そうではなく、神が造られたこの世界に喜びを回復する、もともとの輝きを回復する人たちの出現。この世の中から悲しみや苦しみが無くなるために労し、神の喜びをもたらす人々の出現を、被造物世界は今か今かと待ち望んでいるということではないでしょうか。

このように、キリストの福音というのは、実に大きく実に豊かで懐の広い、まさに被造物世界そのものに喜びをもたら

す知らせであるということ。単に言葉だけではなく、私たちの生活を通し、また存在を通してもたらされるものなのだというのを、聖書は十分に証しているのではないかと思います。

以上、見てまいりましたような「神観、人間観、隣人愛の教理、イエス・キリストへの従順」を考えました時に、私たちが「キリスト者」として、いわばこのような「キリスト」を表す者として、担う者として、どのような類の「福音」を伝えるべきなのか、どのような「宣教」をなすべきなのか、おのずと明らかになるように思うのです。

(4) 愛に基づく宣教

このような在り方について、再び『ローザンヌ誓約』にある文章を見てみましょう。「教会と伝道」という箇所には、次のような文章がございませう。

われわれは、教会のゲッター化から抜け出て、未信者の社会の中に充満して行く必要がある。犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである。……だが、十字架を宣べ伝える教会は、それ自身が十字架のしるしを帯びているものでなければならぬ。教会は、福音を裏切ったり、神への生き生きとした信仰、人々に対する純粋な愛、事業の振興と資金の調達を含むあらゆる面での誠実さを欠くならば、自ら伝道に対するつまずきの石となってしまうことを銘記しなければならない⁽¹³⁾。

「十字架」の福音を宣べ伝える教会あるいは伝道者は、それ自身が「十字架のしるし」を帯びる者、つまりは犠牲的

な奉仕を通して人々に対する純粋な愛を表す者でなければならぬということです。その「福音」を裏切る諸々の行為や姿勢は、つまずきの石となることを銘記しなければならぬということです。実に厳しい言葉です。しかし、真実な言葉だと、私は思います。

『愛』には偽りがあつてはいけません（ローマ二二：九）。本当に愛によつて動いているのか、それとも自分たちの目的を実現するために——悪い言葉で言えば、打算によつて——動いているのか、被災者のように弱い立場に置かれている方々は敏感に感じ取ります。そんなことはすぐに見破られてしまいます。そのような中で、被災地における支援活動が、今日まで続いているということは、確かな信頼を得て受け入れられていることなのです。携わっている方たちが、自分たちの自己実現のために支援活動をしているのではなくて、本当に目の前の方々を助けたい、この方たちのために何とかしたい、その一心で仕えてきたからだと思うのです。これは本当に感謝なこと、素晴らしいことだと思います。

つまり、こうした支援活動を通して私たちが学んだことは、単に支援の在り方ということではない。「十字架の福音」を信じ、それを伝えようとしている私たちが、本当に自ら十字架を負おうとしているのか。単に自分の十字架だけでなく、世の罪のために苦しまれた御方の十字架を表す者として生きているのか。そのような意味での「福音」を届けようとしているのかという、福音宣教の本質そのものが問われたということなのです。そして、それこそが今、私たちが改めて問い直すべきことなのではないかと思うのです。

(5) 『ケープタウン決意表明』(二〇一〇年)

世界福音同盟が世界の福音主義諸教会に向けて、二〇一〇年、震災の前の年に発信した「ケープタウン決意表明」¹⁴⁾と

いう文書が問うていることは、まさにそのような福音理解なのではないかと思えます。この文書全体を貫いているのは「愛」という言葉です。注目すべき文章をいくつか挙げてみましょう。

包括的な聖書の愛こそが、イエスの弟子としての決定的なアイデンティティであり、弟子であることの「しるし」であるべきなのだ。私たちは確認する。……私たちは、愛にあつて歩むとはどういうことかを表現するような仕方では生き、考え、話し、行動するためにあらゆる努力をする。この愛とは、神への愛、互いに對する愛、そして世に對する愛である。

(I : 1 : D / 邦訳一五頁)

神が私たちに命じていることは、必要を抱えた人を思いやりをもって助けることを通して、神ご自身の性質を反映すること、正義と平和のための奮闘と神の被造物の保護とにおいて、神の国の価値観と力を実際に示すことである。

(I : 1 : B / 邦訳四〇頁)

Aキリストの弟子として私たちは真理の民であることを求められている。

① 私たちは真理を生きなければならぬ。真理を生きるとは、イエスの顔になることだ。イエスを通して、視界を覆われた心に福音の栄光が啓示される。人々は、イエスのために忠実に愛をもって人生を生きる人々の顔のうちに真理を見出すであろう。

(II : A : 1 / 邦訳四四頁)

私たちの召しは、他の信仰を持つ人々の中で、神の恵みの香りに深く満たされて生き、また仕えることで、人々がキリストの香りを嗅ぐことができるようにし、神が良いお方であることを彼らが味わい、また見るに至るようにすることである。そのように体現される愛によつて、私たちはあらゆる文化的・宗教的環境において、福音を魅力的なものとするのである。クリスチャンが愛に満ちた生活と奉仕の行為を通じて他の信仰を持つ人々を愛する時、クリスチャンは人を造り変える神の恵みを体現するのである。

(II..C..三ノ邦訳六三頁)

私たちが「イエスの顔」になること。また神の恵み、恵みの福音を「体現」することへの献身が促されています。このような主張が『ローザンヌ誓約』の延長上にあることは明らかですが、もう一方で、いわゆる福音派教会が直面している現実が念頭にあるのではないかとも思うのです。

昨年日本語に訳されて出版されたフリーリップ・ヤンシーの『隠された恵み——福音』は良き知らせになっているのか⁽¹⁵⁾という問題提起の書によれば、米国におけるキリスト教への好感度、わけても福音派に対する評判や信頼は下降の一途をたどっているということです。重要なのは、その理由です。福音派の人たちは、「福音」よりは罪意識を人々にもたらしめている。彼らは、人々を人間としてよりは伝道の対象として見ている。また、救われている自分たちと滅び行くこの世の人たちという優越心や裁く心で人に接する。人の話に真摯に耳を傾けず一方的に話そうとする、等々です。これらは皆、誤った「福音」理解に基づいているのではないかと著者は指摘するのです。そして、主イエスの「福音」を本来の姿に回復する必要を訴えているのです。

(6) 「福音」の受肉化

かつてよく福音の「文脈化」ということが語られました。しかし、今、私たちが心すべきことは、『ケープタウン決意表明』が明らかにしているように)むしろ福音の「受肉化」ではないか。われわれ自身が「イエスの顔」になる。われわれ自身が神の恵みを「体現」するということです。それは決して自分の福音を押し付けることではありません。キリストもご自分を喜ばせることをしませんでした(ローマ一五・三三)。むしろ「おのおの善を行って隣人を喜ばせ」ること(一五・二)です。人々の辛い心や体が回復されて、その顔に笑顔が戻る。その人の心の奥から再び生きる力が湧き出て来るような喜びを与えることです。それが、主イエスがもたらした「福音」ではなかったでしょうか。

そのように私たちが人々に真摯に向き合い、その痛みや苦しみに心を寄せ、語る前にまず耳を傾け、その問題の重さや深さに返す言葉もなく、ただ祈るしかできない自分の無力を嘆き、共に泣き、それでも共に生きて行こうとする時、その時、実は私ではなく、私の中にある神の愛が、その深い恵みが姿を表してくるのではないのでしょうか。本当の意味で「キリスト」が立ち現れてくるのではないのでしょうか。そうして初めて、固く閉ざされていた人々の心が、打算に満ちたこの世にはない「キリスト」という御方の愛に開かれていくのではないのでしょうか。

終わりに

今回のシンポジウムを通して、私たちは東日本大震災を経たこの国における教会やキリスト者の課題を思いめぐら

し、あるいはそこに垣間見られてきた新しい宣教の在り方、その可能性を模索する機会が与えられました。しかし、最後に申し上げたいことは、こうした神学のシンポジウムが決して知的満足で終わってはいけないということです。つまり、計り知れない犠牲者を出した、そして出し続けている現実に対して、ただ知的に考えてわかったような気になってはいけない。むしろ、そのような「十字架」を私たちが共に担うという覚悟なしに、このシンポジウムの成果を語るべきではないと思います。

私たち自身は、本当に無力な存在ですが、しかしそれを一緒に担って行こうと一步を踏み出すこと。もちろん、東北の被災地だけではありません。この国やこの世界を覆っている、とてつもなく重い悲慘に押しつぶされそうになっている人々と共に、十字架を背負って行こうとすること。そして、主イエスがなさったように、その人たちの幸せのため、この世界に喜びを回復するために少しでも役に立とうと献身すること。それが今「この時代、この地でキリスト者であること」の意味なのではないでしょうか。

参考文献（本稿で言及された文献紹介）

- (1) フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』6、秦剛平訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇〇年。
- (2) プリニウス『プリニウス書簡集——ローマ帝国一貴紳の生活と信条』國原吉之助訳、講談社学術文庫、講談社、一九九九年。
- (3) スエトニウス『ローマ皇帝伝』上・下、國原吉之助訳、岩波文庫、岩波書店、一九八六年。

- (4) タキトウス『年代記——テイベリウス帝からネロ帝へ』国原吉之助訳、岩波文庫、岩波書店、一九九三年。
- (5) ヘンリー・ベッテンソン編『キリスト教文書資料集』聖書図書刊行会編集部訳、聖書図書刊行会、一九八八年。
- (6) テルトウリアヌス『護教論』鈴木一郎訳、キリスト教教父著作集第14巻、教文館、一九八七年。
- (7) テルトウリアヌス『マルキオン駁論』Tertullian, *Against Marcion*, VI—V5, Kessinger Publishing, 2004.
- (8) 「イグナティオスの手紙——ローマのキリスト者へ」『聖書の世界』別巻4「使徒教父文書」講談社、一九七四年。
- (9) ヤコブス・デ・ウオラギネ『黄金伝説』前田敬作、今村孝訳、平凡社ライブラリー、平凡社、二〇〇六年。
- (10) イグナチウス・デ・ロヨラ『靈操』門脇佳吉訳・解説、岩波文庫、岩波書店、一九九五年。
- (11) ジャン・カルヴァン『キリスト教綱要 第3篇』改訳版、渡辺信夫訳、新教出版社、二〇〇八年。
- (12) 『ローザンヌ誓約』第五項。〈<http://www.geocities.jp/p1150/Lausanne1.htm>〉 ション・ストット『ローザンヌ誓約——解説と注釈』宇田進訳、いのちのことは社、一九七六年。
- (13) 『ローザンヌ誓約』第六項。〈<http://www.geocities.jp/p1150/Lausanne1.htm>〉
- (14) 『ケープタウン決意表明』日本ローザンヌ委員会訳、いのちのことは社、二〇一二年。
- (15) フィリップ・ヤンシー『隠された恵み——「福音」は良き知らせになっているのか』山下章子訳、いのちのことは社、二〇一五年。